

『入院患者は二度寝ると漏らす』

◇登場人物

・吉田 (22) / 宮野 (28)
・川畑 (32)

◇病院・入院患者用の個室

ベッドがある他には、壁際にパイプ椅子と車いすが置かれているだけの、簡素な部屋。

入院患者の吉田と、医師の川畑が、雑談をしている。

吉田 「ねえ、先生。いつになったら俺は退院できるわけ？」

川畑 「もう少しだよ。たぶん、来週くらいにはその話になると思うよ」

吉田 「来週かあ。長いなく、長過ぎだよ。化石になっちゃうって」

川畑 「でも、化石ってのは地層の中に——」

吉田 「わかってるよ。なりません、化石には。例えばよ、例えば。それだけ長いってこと」

川畑 「例えば。良い例えばだな」

吉田 「わかる？ こんな長いこと病室に閉じ込められてる入院患者の気持ち。いろいろとさ、溜まってるんだよ」

川畑 「わからないけど、溜まってるんだな」

吉田 「それにさ、俺まだ22だよ。抑えきれないよ、若さが」

川畑 「退院したら、やりたい放題だろ。もうちよっとの辛抱だよ」

吉田 「わかってるけどさ……でね、先生。川畑先生。あのさ、お願いがあるんだけど」

川畑 「いやだ」

吉田 「ちゃんと聞いてよ。まだ何も言っていないじゃないか」

川畑 「いやだ。どうせしようもないことだろ。泌尿器科の女医さんに診察されたいとか、産婦人科に隠しカメラ付けてとか」

吉田 「そこまでしないって。だれか看護師さん紹介してよ」

川畑 「いやだ」

吉田 「お願い」

川畑 「男ならいいけど」

吉田 「いやだ」

川畑 「だいたい、吉田くん彼女いるだろ。いつもお見舞いに来てくれるじゃないか」

吉田 「いいかい、先生。そんなこと……関係ないんだよ！」

川畑 「あるよ！ 言ってること最低だぞ、君」

吉田 「勢いでごまかせると思ったんだけど」

川畑 「とにかく、無理だよ。すぐに紹介できるような親しいナースの人がいないんだよ、僕には」

吉田 「そっか……。最悪だよ」

川畑 「言いすぎだろ！ 贅沢言うんじゃないよ。欲しくてもできない人だって、いっぱいいるんだから……」

吉田 「え？ 先生って独身？ 奥さんいないの？」

川畑 「……いない」

吉田 「彼女も？」

川畑 「……いない」

吉田 「えー？ もったいない。先生、カッコいいからモテると思うけどな。それに、お金も結構持つてるんでしょ？ 医者だし」

川畑 「勤務医なんて、大したことないよ」

吉田 「じゃあさ、好きな人は？」

川畑 「(動揺した様子で) ……いない」

吉田 「あ、いるんだ」

川畑 「いないよ、いないよ、いるわけじゃないじゃん。そんなの、絶対、確実に、神に誓っているわけじゃないに決まってるじゃん。なー！ うん」

吉田 「あんたいくつだよ」

川畑 「32だ！ 悪いか！」

吉田 「へー、どんな人どんな人？ ブス？」

川畑 「別に誰だっていいだろ」

吉田 「よし。当てる」

川畑 「無理だよ」

吉田 「まず……女の人？」

川畑 「……まあ」

吉田 「そうだよね。もしこれで男の人だったら俺、そういう人とこの「対」という抜き差しならない状況にいるってことに、ものすごいプレッシャー感じちゃって、すぐ退院しなきゃいけないくなるもんね。……で、日本人？」

川畑 「……日本人だけど」

吉田 「そうだよね。日本人が一番だよ。もしアニータみたいな人だったら、なんとなく嫌だもんね。……で、その人とはよく会ってるの？」

川畑 「まあ……そうだね」

吉田 「そうだよね。ほとんど会ったことがない人に恋してるなんて、そろそろ自分の年齢のこと考えろよ、って話だもんね」

川畑 「忙しいな君は」

吉田 「でさ、その人って、俺も会ったことある？」

川畑 「……うん。あるよ。たぶん」

吉田 「そうだよね。これで相手が広末涼子とかだったら、俺たぶん先生のこと嫌いになっちゃうもんね。なんか良かったり、身近な人で」

川畑 「もうやめようよ、詮索は」

吉田 「いいじゃん、ここまで聞いたんだから。……ってことはだよ、その人って、この病院の人？」

川畑 「……違うよ」

吉田、川畑をじっと見つめる。

川畑 「……そうです」

吉田 「ヒューヒューヒューヒュー。もう、先生ったら、不謹慎ですよ」

川畑 「はい、終わり」

吉田 「え？ 誰誰誰誰？ えー、誰だろう……ブスでしょ……」

川畑 「ブスじゃないからね！」

吉田 「ええとね……宮野さんとか。看護師の」

川畑 「……」

川畑、病室を出て行くこうとする。

吉田、川畑を抑える。

吉田 「当たってんの〜！ いいじゃん、宮野さん。可愛いじゃん」

川畑 「……恥ずかしい」

と、うずくまる。

吉田 「ねえ、川畑先生。告白しようよ。愛の告白」

川畑 「無理だよ。まともに目も見れないんだよ」

吉田 「大丈夫だよ。俺がいろいろアドバイスするから。任せてよ」

川畑 「あんまり君に身を委ねたくない」

吉田 「さ、立ち上がって」

と、無理矢理川畑を立たせる。

吉田 「好きなら、自分からアタックしなきゃ。よし……宮野さんをこの手で！ はい」

川畑 「……なに？」

吉田 「なにして、宣言だよ。宮野さんをこの手で捕まえるんだ宣言」

川畑 「いやだよ」

吉田 「いいから。宮野さんをこの手で！」

川畑 「絶対いやだ」

吉田 「宮野さんをこの手で！ 宮野さんをこの手で！ 宮野さんをこの手で！ 宮野さんをこの手で！ 宮野さん」

川畑 「わかったよ。……宮野さんをこの手で！」

吉田 「よし、いいぞ。宮野さんをこの手で！」

と、イヤらしい顔とイヤらしい手つき。

川畑 「ちょっと意味が変わってきてるじゃないか」

吉田 「よし、じゃあ始めるよ」

川畑 「なにを？」

吉田 「宮野さんと仲良くなるぞ裁判」

川畑 「せめて会議にしてくれよ」

吉田 「まず、宮野さんに彼氏がいるかどうかだけど……いいか。この際そんなこと関係ないな」

川畑 「関係あるんじゃないかな」

吉田 「大丈夫。砕けるだよ」

川畑 「……当たってからね。ただ砕けたら意味がないからね」

吉田 「宮野さんっていくつ？」

川畑 「うーん……たぶん30は行ってないんだよな。28か9か……28.5くらいかな」

吉田 「なんだよ、『5』って。靴のサイズじゃないんだから」

川畑 「あ、たしか靴もそれくらいだったよ」

吉田 「でかっ！ 宮野さんそんな大女だったっけ？ まあ、いいや。とりあえず、先生がやらなくちゃいけないのは、会話。まず話さなきゃなんにもならない。とりあえず、話しかけてみよう」

川畑 「それができたら苦労しないだろう、吉田くうん」

吉田 「いやでも、そこは頑張ってもらわないと。なんでもいいんだよ、ただの世間話でも」

川畑 「でも、仕事以外の話なんてほとんどしたことないし。今さら世間話のために声かけるなんて、なんか変じゃないか？」

吉田 「そっか……じゃあ、偶然を装うつてのは？」

川畑 「なにをするわけ？」

吉田 「宮野さんがよく行くカフェとかレストランとかに行つて、『あれ？ 宮野さん？』

みたいな。そこからアプローチするわけ」

川畑 「なるほど。でも、それでも話せるかどうか……」

吉田 「大丈夫だって。職場ではそんなにでも、場所が変われば会話も弾むもんだよ。上司の悪口なんか言い合ってたさ」

川畑 「たしかに、職場じゃできないもんな」

吉田 「じゃあ、そのセッティングは俺に任せといてね」

川畑 「なんか頼もしい」

吉田 「よし、では、次のテクニク」

川畑 「はい！」

吉田 「その名も、上着は途中で脱ぎましょう！」

川畑 「おー！」

吉田 「まず、会うときはけっこうきっちりめの服で。誠実さをアピールします。そして、途中で、まあ、早い段階がいいですね。『ちょっと暑いですね』なんて言って、上着を脱ぐ。そうすることで、親近感がアップします」

川畑 「ほう」

吉田 「同じ意味で、シャツのボタンを開ける、という技もあります。ボタンを開けてる、ということとは、心を開いている、ということですからね。『あなたといると落ち着きます、リラックスできます』というアピールです。この場合、開きが大きいほど、より親近感が湧きます」

川畑 「勉強になります」

吉田 「さらに親しくなりたい場合には、相手を下の名前で呼びます。宮野さんの下の名前は？」

川畑 「ミキです」

吉田 「ミキさん。二人で会うときはミキさんと呼びましょう」

川畑 「ミキさん」

吉田 「女性は、褒めに弱いです。あまり気付かれないような細かいところを褒めてもらうとさらに弱いです」

川畑 「例えば？」

吉田 「爪の手入れを褒めてあげるとか」

川畑 「ほう」

吉田 「いいと思ったことは、素直に褒めてあげましょう。褒めて褒めて、褒め殺すのです」

川畑 「はい」

吉田 「これで、宮野さんをこの手で！」

と、イヤらしい顔とイヤらしい手。

川畑 「どんな話題で話せばいいかな。トークが苦手なんだよ」
吉田 「大丈夫です。どんなにトークが苦手な人でも盛り上げられる方法があるんです」
川畑 「教えてください」
吉田 「それは……二択！」
川畑 「二択？」
吉田 「あなたはA派ですか？ それともB派ですか？ そう質問して、それについて議論していくのです」
川畑 「なるほど」
吉田 「練習してみますか？」
川畑 「はい！」
吉田 「じゃあ、とりあえずなんでもいいから二択の質問をしてみてください」
川畑 「ええとね……じゃあね……」
吉田 「なんでもいいから」
川畑 「じゃあ……あなたは、シーア派？ スンナ派？」
吉田 「なんだよそれは」
川畑 「イスラム教の」
吉田 「いいよ、イスラムの派閥は。あんたイスラム教徒？」
川畑 「いや」
吉田 「俺イスラム教徒？」
川畑 「わかんない」
吉田 「ちがーう。宮野さんイスラム教徒？」
川畑 「わかんない」
吉田 「ちがーう」
川畑 「ちがうのか？」
吉田 「わかんないけど！ その質問は、イスラム教徒にしかできないでしょ。じゃなくて、もっと、こう、ターゲットを広げて」
川畑 「わかった……じゃあ、あなたは、右派？ 左派？」
吉田 「だから」
川畑 「なに？」
吉田 「そういう、思想的なものはやめよう。その話題で意見が食い違ったら、たぶん血が流れるよ。……だからさ、もっとフランクに」
川畑 「あ、こういうのどう？ あなたは、パン派？ ご飯派？」
吉田 「そうそう、そういうの」
川畑 「あ、待てよ。それだったら麺類派とかイモ派とかいろいろあるからな」
吉田 「考え過ぎなんだよ。それに、なんだよ、イモ派って。戦時中かよ。もっと簡単に」

考えるよ。例えば……イヌ派？ ネコ派？ みたいな」

川畑 「どっちも食べたことないよ！」

吉田 「じゃなくて。食べるのは一旦忘れて、イヌとネコどっちが好きか？ ってことを聞くわけ」

川畑 「ほうほう。やってみます」

吉田 「最後は、相手に気持ちを伝える」

川畑 「ええ？ まずいって。避けられるよ」

吉田 「大丈夫だよ。人間ってのは、相手が自分に好意があることを知ると、よほど生理的にキツイ相手じゃなければ、相手に好意を抱きやすくなるんだって」

川畑 「そうなのか。……でも、好意を伝えるなんて、恥ずかしくてちよつとな……」

吉田 「口で言うのが恥ずかしかったら、手紙にして渡すんだよ」

川畑 「手紙？ 偶然会ったのに、手紙を用意しておくの？」

吉田 「大丈夫だよ、そこらへんはあんまり気にしなくて。相手もその場で読むようなこととはしないだろうから、口で言うより、ちよつとは大丈夫でしょ」

川畑 「そうかな……」

吉田 「文字ではつきりと気持ちを伝える。ただし、想いだけを書き連ねていくだけじゃ、重たい印象を与えてしまいます。なので、ユーモアを加えます」

川畑 「ユーモア？」

吉田 「ええ。『これは気軽な気持ちで読んでくださいね』っていうアピールです。あまり重たいと避けられちゃうでしょ？ それに、ユーモアを加えることで親近感もアップします」

川畑 「はい！」

吉田 「できれば、最後の方に加えるのがいいでしょう。そうすることで、はじめの方が重たく感じられても、最後に中和されて、スッキリと相手の心に残ります」

川畑 「やった！」

吉田 「いま言ったことを実践したら、きつとうまくいくよ」

川畑 「ありがとうございます。うわー、テンションあがってきたー！」

吉田 「よし。それじゃあ、このままの勢いで行っちゃおう！」

川畑 「そうかな。いま、行っちゃうべきかな？」

吉田 「いま行っちゃうべきだよ！ じゃあ俺、宮野さん呼んでくる」

川畑 「待って。……お酒とか、あったほうが良いかな」

吉田 「たしかに、あったほうがやりやすいかもしれないけど。……でも、ここ病院だよ？」

川畑 「大丈夫。薬品室にたくさん、消毒用が余ってる」

吉田 「うそー！ 本気で言ってるの？」

川畑 「すぐ取ってくるから！」

と、病室を飛び出す。

吉田、パイプ椅子と車いすを、向かい合わせて並べる。

川畑、消毒用アルコールを手に戻ってくる。いつのまにか、白衣がトレンチコートになっている。

川畑 「戻りましたー！」

吉田 「はいね」

川畑 「手紙も書いてきましたー！」

吉田 「はいね！」

川畑 「お酒、これだけあれば足りるかな？」

と、消毒用アルコールを掲げる。

吉田 「充分充分。……気合入ってるねー」

川畑 「(トレンチコートを触り) どう？」

吉田 「似合ってる。いつもそれで診察したら」

川畑 「あー、緊張するー！」

吉田 「じゃあ俺、宮野さん呼んでくるから。偶然装うんだから、変なことしないでよ。自然体ね」

川畑 「(上擦った声で) はい！」

吉田、病室を出て行く。

川畑、パイプ椅子に座り、消毒用アルコールを容器から直接飲む。

吉田はナース服に着替え、宮野となって、病室に入ってくる。

宮野 「あれ？ 吉田さんは？」

川畑 「あ、宮野さん。どうしたの？」

宮野 「吉田さんに、病室に呼ばれたので来てみたんですけど……」

川畑 「あ、そうなんですか？ ここにはいないけど。……吉田くんが来るまで、ここ座ります？」

と、車いすを指差す。

宮野 「……あ、はい」

宮野、車いすに腰掛ける。

川畑 「偶然ですね。僕はたまたま、一人で飲んでて……」

宮野 「ここでですか？」

川畑 「ええ。たまに仕事で疲れた時とか、よく一人で飲むんですよ」

宮野 「ここでですか？」

川畑 「ええ。宮野さんも、飲みます？」

と、消毒用アルコールの容器を差し出す。

宮野 「いえ、結構です。仕事なので」

川畑 「……なんか、暑いですね」

宮野 「そんなの飲んでるからですよ」

川畑 「上着脱いでもいいですか？」

宮野 「いいですけど……」

川畑、上着を脱ぎ、ベッドに投げる。

川畑 「……ミキさん」

宮野 「ミサキです」

川畑 「ミサキさん」

宮野 「……なんでしょう」

川畑、シャツの第一ボタンを開ける。

川畑 「あの……えっと……あなたは、犬ですか？ 猫ですか？」

宮野 「え？ ……人間です」

川畑 「……え？ ……あ。アハハハハ。面白いですね」

宮野 「なんですか？」

川畑、シャツの第二ボタンを開ける。

宮野、それを見て怪訝な顔を浮かべる。

川畑 「……よし。えっと、イヌ派ですか？ ネコ派ですか？」

宮野 「……イヌ派ですけど」

川畑 「あ、そうですね。僕はネコ派なんです。可愛いですよ。可愛いですよ、ネコ」

宮野 「……え、ええ」

沈黙。

川畑、シャツの第三ボタンまで開ける。

川畑 「爪、綺麗ですね」

宮野 「そうですか？ はじめて言われました」

川畑 「お手入れとか、されてるんですか？」

宮野 「いえ、何も」

川畑 「そうなんですか？ でも、いいなあ。良い爪だ」

宮野 「何がいいんですか、この爪？ 普通の人と違うんですか？」

川畑 「え？ ……ええ」

宮野 「どう違うんですか？」

川畑 「えっと……なんか、こう……爪に、手がついてる感じとか」

宮野 「……は？」

川畑 「だから、普通の人は、手に爪が付いてるじゃないですか」

宮野 「……ええ」

川畑 「ミキさんの」

宮野 「ミサキです」

川畑 「ミサキさんの爪の場合は、逆なんです。爪に、手なんです」

宮野 「すいません。言ってる意味が……」

川畑、シャツのボタンを全部開ける。

宮野 「なんですか？」

川畑 「暑いですね……」

宮野 「……いいえ。すいません、私、戻ります」

川畑 「あ、待って！ ……これ……」

と、手紙を取り出し、宮野に手渡す。

川畑 「あとで、読んでください

宮野 「……じゃあ」

宮野、車いすに乗ったまま病室を出て行く。

川畑、消毒用アルコールを一気飲みする。

宮野は服を脱ぎトランクス一丁姿の吉田となって、再び病室に入ってくる。

吉田 「どうだった？」

川畑 「わかんない」

吉田 「手応えは？」

川畑 「わかんない。……で、なんで裸なの？」

吉田 「いや、ちよっと間に合わなくて」

川畑 「漏らしちゃったの？」

吉田 「そういうことじゃないんだけど……。ちゃんと上手くやれた？ 俺が教えたこと」

川畑 「ほぼ完璧。あとは結果を待つのみ」

吉田 「なんだ、いけそうじゃん。手紙も渡したの？」

川畑 「もちろん。たぶん、想いは伝わったと思う」

吉田 「手紙、なんて書いたの？」

川畑 「……いやだよ。教えない」

吉田 「お願いお願い」

川畑 「絶対いやだ」

吉田 「お願いだって。いろいろテクニク教えたじゃん」

川畑 「……特別だよ」

と、紙を取り出し、吉田に渡す。

川畑 「それ、下書きだけだ」

吉田、その文面を目で追う。

川畑の声で、その手紙が読まれる。

川畑の声 「宮野ミキさんへ……。突然のお手紙、失礼します。少し、驚かれたかもしれません。この手紙は、いつでも捨ててもらって構いません。ですが、せめて一度だけでも、目を通して欲しいんです。あなたに、どうしても伝えたいことがあって……」

いつのまにか川畑と吉田は消え、吉田はナース服を着た宮野となって出てきていく。

宮野、川畑からもらった手紙を読んでいる。

川畑の声 「僕は、医者という身でありながら、病を患ってしまいました。恋という名の病です。あなたを想うと、動悸が激しくなり呼吸さえままなりません。あなたを目の前にすると、手は震え、足は竦み、名門大学の医学部を卒業したこの頭脳さえ、

まるでブレーカーが落ちたかのように、一瞬で働くのを止めるのです」

宮野、読んでいる途中で手紙を破る。

川畑の声が止むが、しばらくして再び聞こえてくる。

川畑の声「初めてです、こんなに重い病を患ったのは」

宮野、再び紙を破る。

声は一瞬消え、またすぐに聞こえだす。

川畑の声「おそらく、僕の中の、あなたへのこの想いは、心だけでなく、臓器も骨も血液をも蝕み、身体中に転移していることでしょう」

宮野、何度も何度も手紙を破るが、一向に声は止まない。悪魔の声が聞こえてくるかのごとく耳をふさぎ、うずくまる。寒いのか、突然震えだし、近くにあった消毒用アルコールを浴びるように飲む。

川畑の声「ならば、早急に、オペが必要です」

と、突然立ち上がり、耳をふさぎながら走り去る。

川畑の声「さすがに、僕一人で自分自身のオペをするということはできないので、できれば、あなたに手伝ってほしい。僕が、ちゃんと指示を出すから。よし、じゃあ、このメスを握ってください。そうです、これです。ちなみに、このメスは、オスにしか付いていませんが……。川畑」

手紙が読まれ終わる頃には、いつのまにか、川畑と、服を脱いだ吉田が出てきている。

川畑 「どうかかな？」

吉田 「(困惑気味に) うん……いいと思う」

暗転。了。